

くらしナビ

— ライフスタイル —

そこが聞きたい

「尊厳ある孤立死」へ

日本福祉大健康社会研究センター長 斉藤 雅茂氏

死んでもだれにも気づかれない、孤立死はなにが問題なのか。無知からくる、悲惨なものだという決めつけも強くなるが、高齢化が進み、単身世帯も増えるなかでは、すでに当たり前のことになっている。防止策ばかりに偏るべきではない、という日本福祉大学教授で、同大健康社会研究センター長の斉藤雅茂さんに聞いた。

【聞き手・須藤孝】

— 何が問題なのでしょう —

◆ 誰にもみとられることなく亡くなり、腐敗したり、白骨化したりしてから発見される死は孤立死や孤独死と呼ばれる。孤立死が起きると、遺体の埋葬・火葬の手続き、遺品・残財の処理、起きた住宅や近隣の資産価値への悪影響といった社会的なコストはかかります。このため対策が必要だという意見も分かります。

一方で、最期を迎えたい場所を尋ねると「自宅」と言う人が最も多いのです。住み慣れた場所で最期を迎えること自体は問題とは言えません。問題なのは、死後長期にわたって放置され、人としての尊厳が保たれた最期とはいえない形で発見されるに至る、生前の社会的な孤立状態です。

— センセシヨナルに報

— 本人提供



さいとう・まさしげ 上智大学院博士後期課程修了。専門は社会福祉学、公衆衛生学、社会疫学。2019年から現職。著書に「高齢者の社会的孤立と地域福祉」(日本社会福祉学会学術賞受賞)など。

生前のつながり 社会で

じられることもありました。

◆ 悪臭で発見された人は、平均死後15日程度経過しているという報告があります。センサーなどを使えばそれよりも早く、場合によっては死後すぐに発見することも可能でしょう。ただ、社会的コストを最小化するために、1旦でも早く遺体を発見・通報できればよいというわけでもないと思います。生前に人付き合いがとほしくなっている、死んだ時ですら誰にも見つからず、しばらく放置されていることが問題の本質です。孤立死に伴う社会的コストだけではなく、孤立死につながる生前の孤立の問題を考えるべきです。

— 防止策ばかりに偏っても、ということですね。

◆ 早期に発見・通報するシステムそのものは悪くありません。それによって助かる命もあります。高齢者向け住宅

などでは、トイレの水が一定時間流れないと通報する仕組みもあります。しかし、社会的なコストの高さを理由とした一部のリスクの高い人たちの早期発見という発想は、ともすると社会的な排除につながりかねません。「見守りか監視か」という議論もありまです。本人の尊厳や意向を第一にした慎重な議論が必要でしれません。

— 今年初めて、孤立死に

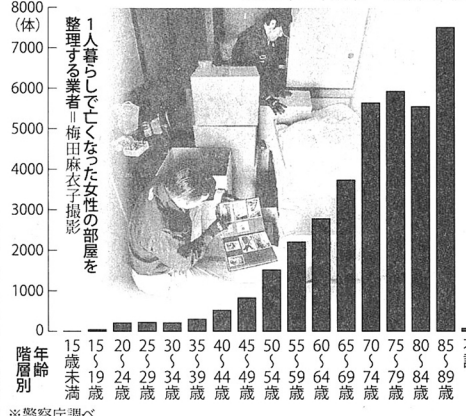
— 行政の対策は防止策に



孤立死についての警察庁調査

警察庁によると、2024年1～6月に自宅で死亡した1人暮らしの人は全国で3万7257人(暫定値)おり、うち65歳以上の高齢者は76.1%の2万8330人。孤立死の実態を把握するために警察庁が今年から集計を始めた。

警察取り扱い死体のうち、自宅で死亡した1人暮らしの者 2024年上半期(1～6月)暫定値



※警察庁調べ

目配りあまねく

— 個別の対策以外ではどうすべきでしょうか。

◆ 難しい人たちがどう支えるかは大切ですが、私はそれだけでは孤立死の数は減らないと思っています。やはり環境を変えることが必要です。近年の日本は人とのつながりが

— よく地域社会のつながりが失われたと言われます。たしかに、自治会の加入率などは低下しています。一方で、ボランティア活動やスポーツクラブなどに参加する高齢者、働いている高齢者は増えています。かつての地縁

— 専門家の役割はどうでしょう。

◆ 政府の政策もそうですが、ともすると孤立対策は一部の深刻なケースに焦点が当たりがちです。それはそれで大切なのですが、孤立死のようには発生規模が大きい場合は、個別のケースに対応するだけでは不十分です。政策がリスクの高い人だけ把握すればいい、という方向に傾かないようには注意喚起するのが専門家の役割かもしれません。



◆ ご意見をお寄せください。〒100-8051 毎日新聞「オピニオン」係。